

労働力調査の結果を見る際のポイント No.7

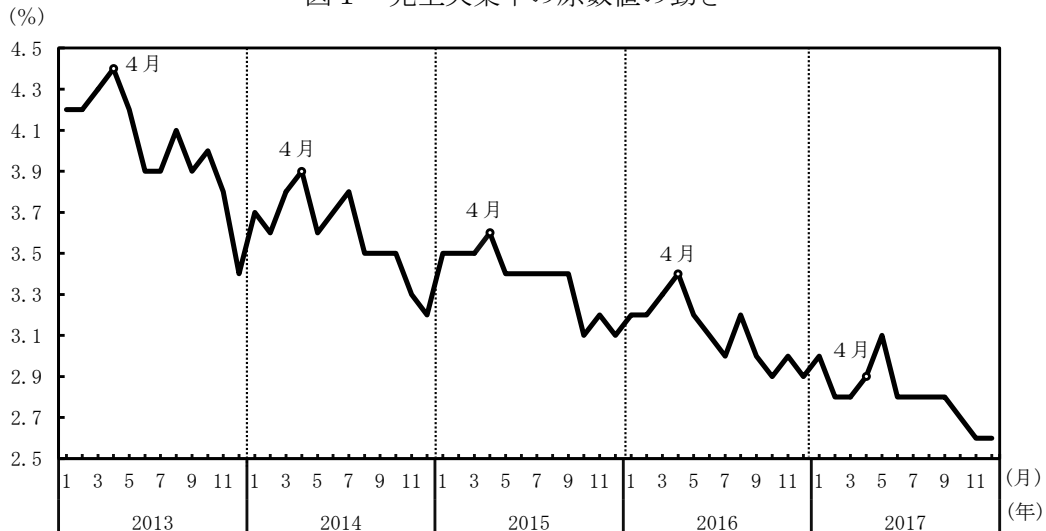
季節調整値の改定

～季節調整値は毎年1月分結果公表時に、過去に遡って改定～

季節調整値を過去に遡って改定しましたので、その概要を説明します^{※1}。

- 労働力調査のような月次統計の原数値には季節変動が含まれます。例えば、完全失業率の原数値の推移をみると、毎年4月ごろは、定年や雇用契約の満了による離職者、学卒未就職者などが一時的に完全失業者となることがあるため、完全失業率が高くなる傾向にあることが分かります(図1)。

図1 完全失業率の原数値の動き



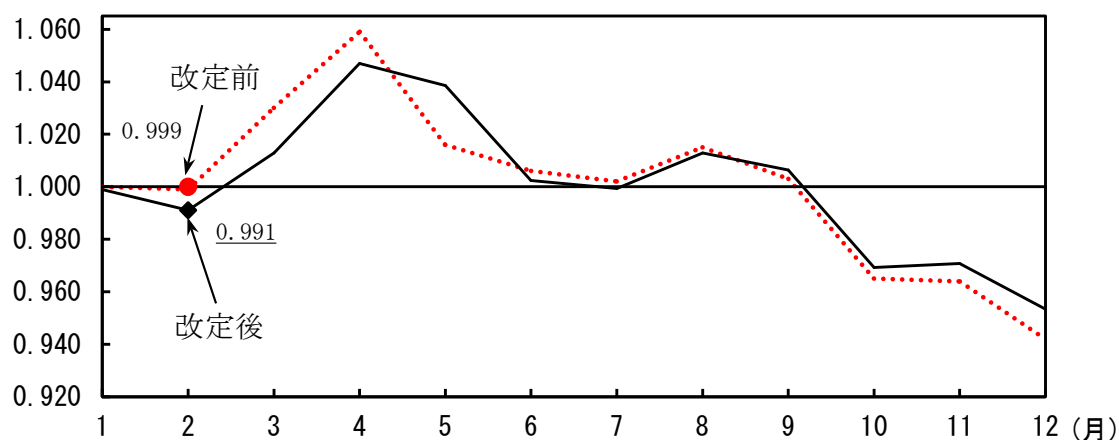
- 足元の動き、すなわち前月からの変化を適切にとらえるためには、こうした季節変動の影響を除く必要があります。そこで、完全失業率のほか、就業者数などの主な集計項目について、原数値から季節変動を除いた「季節調整値」を求めて、公表しています。
- 季節調整値を算出する際には季節指数(季節変動を表す指数)を推計する必要がありますが、季節変動のパターンは、毎年少しずつ変化しています。そこで、直近の季節変動パターンを結果数値に的確に反映させるため、労働力調査では、毎年1月分結果公表時に、過去の時系列データに前年12か月分の結果を追加して、過去に遡って計算し、過去10年分の数値を改定しています^{※2}。

※1 [「労働力調査の結果を見る際のポイント No.4\(原数値と季節調整値\)」](#)も併せて御参照ください。

※2 改定後の季節調整値は、[長期時系列データ](#)に掲載。

- 2017年12月までのデータを加えた今回の改定についてみると、2017年の季節指数は、改定前と改定後で変化していることが分かります（図2）。

図2 改定前後の季節指数（完全失業率，2017年）



この結果に基づいて2017年2月の完全失業率の季節調整値を求めてみると、次のようになります。

$$\text{(改定前)} \underbrace{\frac{188 \text{ (完全失業者数)}}{6615 \text{ (労働力人口)}} \times 100}_{\text{完全失業率(原数値)}} \div 0.999 \text{ (季節指数)} \doteq 2.8\%$$

$$\text{(改定後)} \frac{188 \text{ (完全失業者数)}}{6615 \text{ (労働力人口)}} \times 100 \div 0.991 \text{ (季節指数)} \doteq 2.9\%$$

- 下表は、完全失業率について、今回の改定状況を示すものです。
2017年は、2月が+0.1ポイント、5月及び12月が-0.1ポイントの改定となります。

表 季節調整値の改定状況（完全失業率，2017年）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
改定前(%)	3.0	2.8	2.8	2.8	3.1	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.8
改定後(%)	3.0	2.9	2.8	2.8	3.0	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7
差(ポイント)	0.0	0.1	0.0	0.0	-0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-0.1

網掛けは、改定前後の値に差がある箇所。